

「シニア海外ボランティア」

伊藤 義博

ITO Yoshihiro

消防に国境なし、海外での活動に挑戦

2013年5月22日、正午過ぎ、土砂崩れが発生した。場所はコロンビア北西部、メデジン市にある住宅街の一角。傾斜地の土壌が雨水で流れ出し、見る見るうちに家も崩れていく。住民たちは無事だろうか。現場に緊張が走る。

そこに、サイレンを響かせ、数台の消防車が到着した。消防隊員たちが続々と現場に入っていく。その中に、一人の日本人の姿が。シニア海外ボランティアの伊藤義博さんだ。

JICA Volunteer Story

PROFILE

1951年熊本県出身。東京消防庁に約40年間勤務。退職後、2013年1月から、シニア海外ボランティア(防災・災害救援)としてコロンビアで活動中。

「日本の消防技術で、一人でも多くの命を救ってほしい」

傾斜地が多く、土砂崩れなどが多発しているコロンビア北西部。シニア海外ボランティアの伊藤義博さんは、自然災害から人々を守るため、現地の消防隊員に消防・救助の技術を伝えている。

1970年から約40年間、東京消防庁の消防隊員として勤務。火災や土砂崩れなどの自然災害や交通事故などの現場で、消火や救助活動を行ってきた。また、現場で指揮を執る隊長として、長年にわたり若手隊員の訓練も担当。東日本大震災では、車両の整備、食料の確保、資機材の点検などを先導し、東京から被災地にいち早くレスキュー隊を送り出すべく奔走した。

そんな伊藤さんの職場にはある教えがあった。「消防に国境なし」。これにのっとり、東京消防庁では、海外の災害現場にも積極的に隊員たちを派遣してきた。「私自身は海外で活動したことはありませんでしたが、アルメニアや中国・四川で起こった地震などで同僚が活躍している様子を、身近に見聞きしてきました。政治、思想、人種などに関係なく、一つの命を救うのが消防です」。いつかは自分も海外で活動したい。その思いを抱き続け、退職後、シニア海外ボランティアとしてついにその夢をかなえた。

安全な活動が何より大事

赴任したメデジン市は、山に囲まれてこう配がきつく、30〜40度もある傾斜地に建物が密集している。少し雨が降っただけで、土砂崩れが起きてしまい、土砂に埋もれて命を落とした人もいる。

現地の消防隊員と活動してみると、ある課題が見えてきた。「消防器具の取り扱いや救急処置など、実践的な技術が身に付いていない。日本では新人隊員に対して1年かけて研修を行います。ここではせいぜい2、3カ月。現場での訓練もほとんどありませんでした」。

そこで伊藤さんは、隊員たちの技術向上に乗り出した。しかし、外国人である自分が、新しいやり方



a. はしご車で安全に建物に近づく方法を指導
b. 装備品をきちんと身に付けることは安全管理への第一歩
c. 消防車の資機材が安全に使用できる状態か点検リストで確認
d. 土砂崩れの現場。上の住居は倒壊の危険性がある



はしごを安定して建物に取り付けられるよう、網の結び方を指導する伊藤さん(中央)



を押しつけても意味がない。そこで、「日本ではこうしている」という実践例を紹介し、あとは彼らにどのやり方が良いかを考えてもらうことにした。「点検リストを作れば、消防器具の状態を効率的に管理できます」「チームになって救助活動を行った方が、より早く、正確に活動できますよね」など、伊藤さんが現役時代に身に付けた消防士としての「術」を伝授した。

これが効果てきめん。現地の隊員たちは「だから今までうまくいかなかったのか!」と日本の消防活動に興味津々。「これは使える」と思うものがあれば、同僚と試行錯誤して「コロンビア風」にアレンジし、積極的に取り入れ始めた。

中でも、伊藤さんが絶対に広めたかったのが安全管理の意識だ。多くの危険を伴う災害現場では、いつ、何が起きるか分からない。「日本では、ロープなどの装備がきちんと身に付けられているか確認し合ったり、建物に入る隊員の後方で倒壊の危険性がないか監視したりと、チーム全体で安全に細心の注意を払います。助けに行く隊員が災害に巻き込まれては、助かる命も助かりません」。伊藤さんの力強い言葉に、現地の隊員たちも心を動かされ、安全管理の手法を実践するようになった。

また、伊藤さんは彼らの努力を褒めることを忘れない。自信を付けて、次のステップに進んでもらうためだ。日本でも長年後進の指導に当たってきただけあって、そのタイミングはお手もの。彼らのやる気に火を付ける「コツ」を知っている。

消防士としての使命を共有し、現場で使える技術の向上に取り組みたい。日本から来た大ベテランの消防士の力を借りて、現地の隊員たちは闘志を燃やしている。